

vol.13 長野 大輔さん

「楽しい」のコラボがまちをつくる。協働の実現を目指して。



長野 大輔（ながの だいすけ）

栃木県市貝町出身。作新高校卒業後、宇都宮大学で森林科学を学び、環境コンサルティング企業に入社。その後退職し、宇都宮大学大学院に進学。在学中に真岡市の市民活動推進センター「コラボレもおか」のボランティア活動に携わり、そのまま同センター管理者のNPO法人ま・わ・たに入職。現在は同NPO事務局にてコラボレもおか事務局長。日本野鳥の会会員。真岡まちづくりプロジェクトにも携わる。

リード文

真岡市の市民活動推進センター「コラボレもおか」事務局長を務める長野大輔さん。やりたいことのある人が活動しやすくなるよう、アシストする仕事にやりがいを感じているといます。地域を支える市民活動から、どんなまちづくりを目指すのか。お話を伺いました。

やりたいことのある人をアシスト

—長野さんのご活動について教えてください。

長野：真岡市の NPO 法人ま・わ・たの事務局で働いています。ま・わ・たの活動は大きく 3 つ。市から受託している市民活動推進センター「コラボレもおか」の運営、フードバンク、福祉作業所における一時預かり（？）です。

私はその中で、市民活動やボランティアをさまざまな面からアシストする、コラボレもおかの事務局長を務めています。市民活動やボランティアをしたい人と受け入れたい人、必要な情報や物事をつなげるボランティアコーディネーターという役割ですね。

例えば、「フリースクールをやりたい」という方がいらっしゃったら、事業の相談にのったり、知見のある方々のネットワークを紹介したりします。コラボレにいらっしゃる方の相談内容は、人を紹介してほしいというものから NPO の設立方法を教えてほしいというものまでさまざま。伴走して支援することもありますし、スキルアップの講座を開くことも。補助金や助成金の情報、寄付の募り方のノウハウなども発信しています。

—そもそも、ボランティアや市民活動とはどんな活動を指すのでしょうか？

私たちは、自発性、無償性、社会性がある活動のことと定義しています。自発性とは、誰かに強制されるのではなく、自分から進んで物事を行おうとすること。社会性とは、ともに支え合い、学び合えること。無償性は、金銭的な見返りを求めないことです。ただ、無償性といっても、目的が報酬にないだけで活動を継続するための資金調達が必要です。このあたりは誤解されやすい部分ですね。あとは、誰もやっていない周囲を良くする活動という意味で先駆性が定義に加えられることもあります。

ボランティアや市民活動の定義は広く、たとえば営利目的の組織である株式会社の CSR 活動も、私たちがアシストする対象になると考えています。

—なるほど！長野さんはどんなところにやりがいを感じますか。

コラボレを訪れた方のやりたかった活動が活性化して、花開くのを見るのが喜びですね。自分が中核となって何かを行うよりも、外側で支えることにやりがいを感じます。誰かのアシストができたときに嬉しいです。

コロナ前にはボランティアをしたい方と受け入れ団体とをつなげるイベントを開いていたのですが、そこで良いつながりがつくれたときなどは達成感がありました。今年はボランティアに関心がある高校生と、自治会とをつなげる企画を考えています。



一度は大嫌いになったボランティア、コラボレで良さを実感

—もともと、コーディネーターの仕事をされたいと考えていらっしゃったのですか？

長野：いえ、全然違う仕事をしていました。小学校のとき鳥に興味を持って、大学で鳥を中心に生態系について学んだんです。その後、道路や大規模施設の建設の際、生態系への影響を調べる環境コンサルタントの職に就きました。今も鳥を見るのが好きなので、野鳥の会や自然環境保全の活動もしています。

—鳥がお好きなんですね！好きになったきっかけは？

通っていた小学校が、野鳥に親しむことを目的にした「愛鳥モデル校」に指定されていたんです。年に何度も鳥の観察会をしたり、コンクールで活動発表したりしているうちに好きに

なりました。単純に見ていてかわいいですし、そこにしか生息していない珍しい鳥に出会えるとテンションが上がります。

ー研究してお仕事にまでされるのはすごいですね。環境コンサルタントからどのようにして今のお仕事へ？

宇都宮市で環境コンサルタントとして3年ほど働いたのですが、だんだん違和感を覚えるようになりまして。私たちは生き物のために調査するけれど、結局は工事をするんですよね。道路や建物をつくる工事はもちろん悪いことではないものの、生き物の生息場所はほぼなくなってしまう場合が多いのです。工事を実施するための調査をしてお金をもらうことに疲れてしまいました。

一度研究の世界に戻ろうと考え、宇都宮大学の大学院に進みました。生活のために鳥の調査のアルバイトをしていましたが、冬になるとほぼ案件がなくなってしまうんです。どうしようかと思っていた時、コラボレもおかの求人を見つけ、アルバイトに応募しました。

ーアルバイトから入ったのですね。コラボレで働こうと思われたのはなぜですか？

ボランティアって何だろうと疑問に思っていたからです。私は学生のころから野鳥の会やNPOなどのボランティア活動を続けていました。しかしそのころ、強制的にイベントを手伝わなくてはならなかったり、年々責任が増してきたりと、しんどくなっていたんです。これまでお世話になってきたから恩返しをしなくちゃ、役割をいただいたからやらなくちゃという気持ちが強く、ボランティア活動をする事自体が苦しくて。もっとうまくできないのかなと、ヒントを探して応募しました。

コラボレには、ボランティアについて専門的に勉強して実践してきた専門員の方がいらっしゃいました。そこで学ぶようになって、もやもやが解消できましたね。ボランティアは自発性が大事。若干無理をしなくてはいけないことはあっても、強制されるものではないと改めて思えたのです。責任感や義務感ではなく、まず自分が楽まなきゃダメだよ、と。個人ではなくチームでやる事が大切だとも感じました。

それまではボランティアに対して嫌な気持ちがあって、もはや大嫌いになっていました。でも、学ぶことでボランティアっていいな、面白いなと思えるようになったのです。もっとさまざまなことを学びたいし、自分のように活動している人がボランティアを嫌いにならないようにしたいと考えるようになりました。それでコラボレで働くことにしたのです。



個人が集まり一緒につくる。まちつくで知った協働

一昨年は、真岡まちづくりプロジェクト（以下、まちつく）でも活動されました。実際に参加されてみていかがでしたか。

長野：コロナで活動自粛が続く中で始められていてすごいなと思い、市民と一緒にやるなら、力になれることがあるかもと参加させていただきました。

始まってみて、メンバーの皆さん一人ひとりに地域をよくしたいという想いがあるのがとても印象的でしたね。大人の方は、それぞれ名前や団体は知っていたものの、つながる機会がなくて。実際に話してみるとこんな面白いことを考えているんだと、自分とは違った目線を知れてよかったです。

まちをより良くするという目的は一緒でも、アプローチが違う。そんな人たちが集まって一緒に何かをつくっていくのは、まさにコラボレのビジョンにもなっている「協働」だと感じました。

協働という言葉はいろいろなところで使われていて、協働を目的にした施策が生まれることがあります。誰かと一緒に何かをしたらなんでも協働になるわけじゃないんですよね。協働はあくまで結果。一人ひとりが楽しく活動している中で、同じ方向を見ている人が集まって一緒に進み、より大きな成果が出せた、それが協働できたということだと思っのです。

たとえば五行川河川緑地「RIVER+」でのプロジェクト。みんながやりたいことを自発的に出し合う中で、ピクニックマルシェを開催したり、ドックランを設置したりできました。どのチームも面白い結果が出ていて、まちつくはまさに私の思う協働がたくさん生まれていました。



地域課題を自分たちの手で

—ありがとうございます。最後に、今後の展望を教えてください。

今後は、ボランティアや市民活動についてもっと知ってもらえるよう活動したいです。今はまだ、コラボレのことをちゃんと伝えられていないと感じます。「事務局がやってよ」「手伝って」「お金出して」などと言われることもありますが、何でも屋ではないんです。

ボランティアや市民活動は、あくまで自発性が大前提。ここは、なにか課題意識があって、現状をどうにかしようとして行動したい人をお手伝いするための場所です。それぞれできない理由はあるにせよ、課題に対してまず石を投げることはできるはず。一石を投じて課題を共有するだけでも違うと思いますし、そこからネットワークをつなげていくことも可能です。

私は、地域の課題への対応が最もスピーディーにできるのがボランティアや市民活動の良さだと考えています。以前は、地域のつながりと家庭と行政とが暮らしのうえでの課題を解決していました。でも今は、時代の流れの中で地域や家族の機能が弱まり、隙間ができていく。それをどう埋めていくかが課題だと思うのです。企業活動もちろん大事ですが、収益を考えるとすぐ動けないこともあります。それではカバーできないものをフォローしていくボランティアや市民活動は、世間からは見えにくいけれど必要とされているものだと思うのです。

まちつくもその一つ。すでに1年目の成果が出ていて、イベントをやったことで RIVER+ を使いたいという市民の方からの問い合わせにもつながりました。そんな風に、自発的に何かをやりたい方が増えるといいなと思います。まちつくのような活動が増えていくことで、「協働によるまちづくり」ができるはず。行政、支援組織、企業、個人がもっとつながってネットワークができれば、なんでもできちゃうんじゃないかと思うんです。人頼みではなく、自分たちで一緒にやっていく、そんな空気のあるまちにしていきたいです。

